

*Kappa Novels*



長編推理小説

はく ちゆう し かく  
白昼の死角

たか ぎ あき みつ  
高木彬光

お願  
し

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 白昼の死角

昭和35年6月30日 初版発行  
昭和50年8月1日 115版発行

著者 高木 彬 光  
東京都渋谷区本町1-8  
発行者 小保方 宇三郎  
印刷者 鈴木 貞三郎  
東京都文京区水道1-2-1  
公和印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社  
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(榎本製本)  
表紙の模様・意匠登録 116613 © Akimitu Takagi 1960

(分)0-2-93(製)02006(出)2271 (0)

長編推理小説

はく ちゅう し かく  
白昼の死角

たか ぎ あき みつ  
高木彬光



目次

恐るべき天才	五
一生を分 <small>ぶん</small> で刻む男	一四
ムツソリーニ作戦	五九
詐欺 <small>さぎ</small> から逃 <small>のが</small> れるための詐欺	九六
パクリという詐欺	一三四
虚栄の変相	一七一
完全犯罪	一八九
導入を使う詐欺	二三六
ジョーカーを捨てる	二六四

八方 <small>はつぱう</small> やぶれの戦術……………	二八三
三人の女……………	三三〇
三日間の報酬……………	三三九
屠殺 <small>とさつしや</small> 者の笑い……………	三七六
運命の反転……………	四一三
神を恐れざる男……………	四四二
エピローグ……………	四六七
あとがき……………	四七一

## 恐るべき天才

私がこの物語の主人公、鶴岡七郎つるおかしちろうに初めて会ったのは、昭和三十三年の夏、箱根はこね芦の湯あしゆの温泉宿でのことである。

そのころ、私はひどい胃腸障害になやんでいた。生まれつき、消化器系統の強さには、自信があった方なのだが、作家生活にはいつてからはろくに運動らしい運動もせず、毎日コーヒーをがぶ飲みし、百本近くの煙草たばこを煙にしながら、十何時間もぶっ通しに机の前にすわっているという生活を十年あまりつづけたために、どうしても、体のあちらこちらに故障が起こってきたのだらう。病名は急性胃腸カタルということだったが、過労のため、神経もまいりきっていることを見ぬいた医者は、口をすっぱくして、転地療養をすすめてくれた。

たしかに、暑さとひでり続きで、東京にいても仕事はろくにできそうにもなかったし、日ごろは無茶ばかりをしている私も、すっかり弱気になっていた。

それで、トランク一杯に、原稿用紙と参考書をつめこむと、一月ほど滞在の約束で、芦の湯の旅館に部屋を借りたのだが、清涼な山気とぬるい硫黄泉いおうせんは、思ったよりも胃腸にききめがあった。

一週間もたったときには、健康は眼めにみえて回復してきた。これが東京だったなら、とたんに気をゆるめてすぐぶり返しになるところだろうが、さいわいこういう山の中では、夜になってから遊びに出かけるわけにもいかなかった。

それで、私は夜になると、将棋盤にむかって将棋雑誌の棋譜をならべ、ひとりで楽しんでいた。

できるだけ、静かに駒を動かしているつもりでも、こういう山の中の宿だけに自然に駒音がとなりに聞こえたのかもしれない。

三日目の夜、女中が顔を出して、

「先生、実はおとなりのお客さまが、よろしかったら、将棋のお相手を願えませんか——と申しておられます。」



といい出したときにも、私はべつにふしぎにも思わなかった。

「さあ、どうぞ、将棋連盟から『特二初段』の免状はもらっているけれども、実力は天壤無級だといってくださいよ。」

などと冗談をいいながら、部屋をかたづけさせて、私はこの思いがけない棋友をむかえた。

これが鶴岡七郎だった。

見たところ、私よりもちよつと下、三十を二つ三つ越したぐらいの年輩のようだった。

眉は濃く、口は大きく、顎もボクサーのようになりしている。ふといセルロイド縁の眼鏡の底で光っている両眼にはこちらを射すくめるような力があった。

一口にいえば、政治家、池田勇人をずっと若くし、さらに凶太くしたような人相だった。よほどスポーツで鍛えているのか、浴衣の袖からつき出している両腕も、隆と肉がもりあがっていた。

「一局お願いいたします。こちらは退屈しきっていたので、駒の音をきいたら、だまっていられなくなりましたね。」

といいながら、彼は楽しそうに駒をならべた。

勝負は六番さして、三勝三敗の指分けに終わったが、力量は彼の方が、はるかに上と思われた。序盤はたいいてい、私の有利なように展開するのだが、中盤から終盤にかけてのねじりあいになると、圧倒的にむこうに分があった。それでもどうにかこうにか、五分五分の成績にこぎつけられたのは、私が何年間か、高柳八段や芹沢五段の稽古をうけて、序盤の形や定跡にかけては、いくらか知識が上まわっていたためだろう。

むこうも、いい相手ができたと思ったのか、それから後は毎日のように、私の部屋を訪ねてきた。さいわい、こういうところまでは、めったに編集者も訪ねては来ないから、私はひさしぶりに、心おきなく、将棋三昧にふけることができた。

私が推理小説の作家だということは、むこうは、早くから知っていたようである。しかし、私の方はべつに、彼の職業をたずねようもしなかった。ヒルマンの自家用車は持ってきているし、まだ独身のようだし、私のように病気の保養とも思えないし、おそらく、少壮実業家だろうが、結構な身分だと思っていたのである。

そのうちに、彼は私をドライブにさそってくれた。おりからの好天気にくぐまれて、富士をはるかに望む十国峠まで、車を走らせていたとき、私はとなりの運転台でハンドルを握っていた彼に、何気なく質問した。

「鶴岡さん、あなたのお仕事はなんですか？」

彼はちよつと首を曲げて、私の顔を見ると、にやりといたずらつ子のよ様な笑いを浮かべた。

「まあ、あててごらんなさいよ。」

「実業家ですか？」

「違います。」

「株か小豆の相場でもおやりなのですか？」

「違います。」

映画俳優や流行歌手とは思えない。小説家や画家でもないはずだ。政治家としては、こんな若さで、自家用車をのりまわせるとも思えない。正直なところ、私には全然見当がつかなかった。

彼はそのとき、大声で笑い出した。

「私の商売は、先生のお書きになる小説のモデル——犯罪者なんですよ。」

このときぐらい驚いたことは、私も最近おぼえがなかった。

いかに、推理作家というものは奇想天外な場面を考え出すのが専門だといつても、こんな場面は、はるかに私の想像を越えていた。

白昼、こういう場所をドライブしながら、わずか数日の知合いにすぎない一作家に、自分の秘密をもらすような、阿呆な犯罪者がいようとは考えられなかったのである。

かすかな笑いを浮かべている彼の横顔を見つめながら、私はその言葉を冗談だときめこんでしまった。

しかし、この告白は、よほど彼の心にかかっていたのだろう。夕方、宿へ帰って、私の部屋でビールを飲んでいる間に彼はテーブルの上に身をのり出して、

「先生は、さっき私が犯罪者だと申しあげたらおかしな顔をなさいましたね。それが本当だったらどうなさいます？」

とたずねてきた。

「このコップを持って廊下へ逃げだしますよ。青酸カリを入れられないうちに。」

と、冗談をいったものの、私は相手の眼を見てはっとした。彼は真剣そのものだった。決して嘘をついているとは思えない。

もちろん、私はこれまでに、警察署なり法廷なり、取材のために訪れた暗黒街なりで、数多くの犯罪者に会っている。しかし、敏腕な青年実業家のように思われる鶴岡七郎の印象は、そういう人びとは全然違っていた。

もし、彼が犯罪者だとすれば、その犯罪はどのような種類のものだろうか？

大金を横領おうりよう拐帯かいたいして、こうして一人で逃げまわっているのだろうか？ 密輸とか麻薬の取引とか、そういうあくどい方法で、金を作っているのだろうか？

そういう私の心の動きを、顔色から見やぶったのか、彼は静かな声でつぶけた。

「先生は松本先生まつもとの『眼の壁』という小説はお読みでしょうか。あれをどうお考えですか？」

「傑作ですね。特に捜査二課の事件をあつかったあたりにはすっかり感心しました。ああいう作品は、とても私には書けませんねえ。」

私は正直に答えたが、そのとき彼は大人が子供に対す

るような笑いを浮かべていった。

「そうでしょうか。もちろん、推理小説としての評価は私にはわかりません。ただあの小説の中に出てくる。パクリ詐欺さきぎは、私にいわせれば、兇戯きんぎに類するものですよ。」

「なんですって！」

私も今度は完全に打ちのめされたような思いがした。「私が犯罪者だというのはそういう意味です。私は自分の精根を傾けて、この十年、法律の盲点だけを研究してきましたのです。いや、理論の研究だけではなく実行もしました。その中にはわずか半日、資本金何億の上場じやうじやう会社を作りあげて、たちまち消滅させた事件もあります。一国の公使館を舞台にして、公使から門番まで全部の館員を半年近くだましつぶけた事件もあります。先生はその話をお聞きになりたいとお考えですか？」

「うかがいたいものです。よろしかったら。」

私はめったにない興奮を感じていた。

職業作家になってから、私は数えきれないほど、材料を売りこまれた。しかしその大半は、九割までは、どうにもならないものだった。

本人には、稀有けうの体験だと思われてもそれが作家の眼

から見て興奮を感じずることは珍しい。まして、恋愛小説の題材ならばともかく、推理小説の題材となるような事件は、まず一つもないといってよかった。

彼はそのとき、その会社消滅事件と公使館事件との概略を私に話してくれたが、その物語には私も腹の底から驚嘆した。

驚くべき犯罪者には違いないが、犯罪もこれほどあざやかに、天才的になってくると、ふしぎなことには、人間を憎む気持がうすくなってくる。

それはたとえば、河内山宗俊こうちやまそうしゅんとか、アルサーヌ・ルパンとか、そういう作り出された悪人に、われわれが一種の魅力を感じるのと似たような心境かもしれなかった。

「先生、ある時期になったら、この話は全部そのまま発表なさっても差支えありませんよ。ただ、関係者の名前だけを仮名かめいにしてくださいされば——いまの二つの事件だけではなく、私の関係した全部の事件をお書きになってもかまいません。」

この言葉は、いよいよ私をおどろかせた。

たとえ、彼がこうして打明け話をしてくれたといっても、私はそれをそのまま発表できるとは思っていなかった。

たのだ。かりに相手が悪人としても、男と男の話として、秘密を打ちあけてもらったのだから、せめて形をかえた部分的な素材として、何かの作品に織りこめたら、それで上々と思っただけなのである。

「それで、あなたにご迷惑はかからないのですか？」

「正直なところ、私は自分でも、今までやってきたことが、このごろいやになっていのですよ。懺悔ざんげ話というわけではなくても、人間というものは、自分が新しい道にはいろいろとしているときには、それまでおかしてきた罪をいっさい誰かにぶちまけてしまいたいような、そんな心境になるものですね。先生と、こうしてここでお会いしたのも、これも何かのご縁でしょうから。」

彼の声はふしぎなくらい澄んでいた。

その翌日から四日の間、私はほかの仕事を全部投げ出して、彼の物語をくわしくノートしていった。

のべ五十時間近く、大学ノート二冊をすっかり書きつぶして、それでほとんど疲れを感じなかったのだから、私もよほど興奮したのだらう。

だが、そうした仕事を続けている間に、私の心の中には、一種の迷いとためらいが生まれていた。

この物語は恐るべき背徳の書となる危険がある。完全犯罪の教科書として悪用される恐れがある。何か犯罪が起これば、世間ではよく探偵小説の影響で——と非難するが、そういうことになったら、どうしようという心配だった。

鶴岡七郎は、それから三日ほどして山を下った。そのとき、宿の前で車を見送りながら、私は心の中で、彼がこれからこの恐るべき天才をほかの方向にむけて、正しい道で成功してくれるようにと祈らないではおられなかった。

私の親友の伊吹<sup>いぶき</sup>検事が、この宿に、私を訪ねてきたのは、それからさらに一週間ほど後のことだった。

彼と私はむかしの高等学校以来、数少ない親友の仲だった。文科と理科、法学部と工学部、そして検察官と推理作家というように、生涯のコースの大半は、ほとんど共通するものもなかったのに、今でも兄弟のような友情に結ばれているのは、やはりむかしの高等学校の寮生活のおかげだろう。

今度は、休暇で勤務している九州<sup>きゅうしゅう</sup>福岡<sup>ふくおか</sup>の検察庁から

上京し、そのついでに、私のところへ寄ってくれたのだが、私もいい機会だと思ったので、鶴岡七郎の話を持ち出し、私の創作した物語ということにして、彼の感想を聞こうとした。

ところが、この一連の事件は、私以上に彼を興奮させたいらしい。最初はあれこれと半畳<sup>はんじょう</sup>を入れながら聞いていたのに、一時間もすると、すっかり真剣な顔になって、身をのり出してきた。それから便所へ立つ以外は席もはずさず、私がもう打ち切ろうかといいい出して、首をふって話をやめさせなかった。

そのときは、一番基本的な、法律家の興味を持ちそうな事件の骨格だけをとりあげて話したのだが、それでもすべての事件を説明し終わるまでには、七時間近くかかった。

「高木<sup>たかぎ</sup>君、これは恐ろしい事件だね。僕は自分で、まだこれだけの事件にぶつかったことがないだけ幸運だったよ。」

そのとき、彼は大きく溜息<sup>ためいき</sup>をついていった。これはもちろん、検察官という立場をはなれた一人の人間としての偽<sup>いつわ</sup>らざる告白だったに違いない。私はそのとき、せき

こんで質問した。

「それでは、僕がこれを作品として発表したらどうする？」

とたんに、彼の顔からは血の気がひいた。その全身には痙攣けいれんのようなものが走った。

「やめたまえ。高木君、その作品の発表だけはよしたまえ。」

「なぜだ？」

「なぜというのか？ 君が今さら、その理由をたずねるのか？」

彼は真赤まっかになっていた。しかも青黒い怒りの影が、電光のようにその顔をかげった。

「君がこれほど、法律に深い知識を持っているとはいかになんでも思えないから、おそらく、実際の事件だろうが、僕のこうして聞いた話の印象では、これは日本犯罪史上、最高とっていいほどの知的犯罪だよ。ただ、君がこれを作品として発表したとしたら、それは法律に對する挑戦だ。悪の挑発だ。もし、誰かが君の作品を読んで、その筋書通りの犯罪を大胆しかも細心に実行してきたとしたなら、われわれ検察官としては、ほとんど手

の打ちようもないのだよ。」

これは過去二十何年かの交友を通じて、私が初めて耳にしたくらいに満ちた言葉だった。しかし、彼の立場とその人生觀からすれば、それも当然のことだったろう。

あまり彼の態度がきびしかったので、私はそれ以上この問題にはふれず、それから酒をのんでそのまま横になってしまった。

床をはなれたのは、昼すぎだったが、それから二人とも、まるで意地になったように、この問題にはふれなかった。

せつかく、この箱根はこねの宿まで訪ねてきてくれたのに、このまま帰られては後味が悪いと思ったので、私はその夜、彼を芦あしの湖この湖水祭りにさそった。

箱根から、七色の電灯を一面に飾った納涼船に乗って、私たちは元箱根もとはこねへむかった。東京ではうだるような猛暑と水不足にあえいでいるというのに、この湖上は晩秋を思わせる涼しさだった。

それだけではなく、霧も出てきた。この調子では、花火や灯籠流しとうろうながしの方もどうなることかと、私は心の中で心

配していた。

だが、この霧のために、この祭りには、かえって夢の国のような美しさがともなってきた。

湖の上にただよう何百何千の灯籠も、速力を落としたり、ゆっくりと湖上を巡航する数隻の船の飾り電気も、鳥居の形に炎々と燃えあがるかがり火も、中空に開く七彩の花火も霧というベールを通して見るだけに、かえって思いがけないまぼろしのような異常な美しさをもっていた。

「花火を見ると、僕は今でも思い出すよ。戦争中の十字砲火を——。敵味方、命をかけたうちあいを。」

甲板の木の椅子にもたれて、空を見つめながら、彼はぼつりといいだした。

彼は、私とは違って、今度の戦争中は第一線で命をかけて戦ってきた勇士なのだ。

「悪かったかな？ さそいだして。」

きのうのきょうで、また彼の感情を害したのではないかと心配した私はせきこんでたずねたが、彼はだまって首をふった。

「かまわないさ。あれから十三年——。命をかけた戦争

も、今となっては一つの夢だ。」

それから一、二分ほどした後で、彼は突然、思いだしたようにいいだした。

「高木君、きのうの話はとり消すよ。あの作品は発表したまえ。」

「どうしてだ？」

いったんこうといいだしたら、なかなか、説を曲げない彼の性格は、私もよく知りぬいていた。それだけに、彼がこういうことをいい出した原因もわからなかったが、彼はそのとき、かすかな笑いとともに言葉をつづけた。

「僕はいま、あの花火を見ているうちに戦争中の教訓を思い出したのさ。敵も味方も、雨あられのような砲火をあびせあっているときには、動物的な本能と、戦争の体験によって身につけた知識とが、生死を左右する要素となる。それなのに、どんな激しい火力でも絶対に弾丸をうちこめない場所がある。軍事用語では死角といっているが。」

「なるほど、それでは昨夜の話は、たくみに法律の死角をついた犯罪だというわけだね。」

「そうだとも。そういう意味で、この事件を考えだし実行できた人物は、恐るべき悪の天才だ。それはいったい何者だね？」

「それはいえません。たとえ、君と僕との間でも、男としていえないことはある。」

「なるほど、それではたとえ、僕がこの事件をあつかうことになったとしても、君を参考人として喚問はできないわけだな。」

彼はいかにも検事らしい冗談をいった。

「とにかく、君の作品の主人公には、僕も大いに敬意を表するな。彼はルパンだ。戦後の日本の異常な社会情勢の生み出した超人的な犯罪者だ。もし君が、この人物の性格と行動とを、いま僕が印象づけられたように、あざやかに描きだせたなら、これはおそらく、君の作品中、一、二をあらそう傑作となるだろうね。」

「そうすると、君は僕個人の名声なり収入なりのためにこれを発表しろというのか？」

私はちよつと皮肉な聞き方をしてみたが、彼はだまつて首をふつた。

「そうではないよ。高木君、人生というものは戦いだ。」

特にわれわれのように、毎日生々しい犯罪に直面している人間には、その実感も人一倍濃く強いものだ。ところが戦争というものは、攻撃兵器が進むにつれて、防御兵器も必ず進歩してくるのだよ。」

「なるほど、君のねらいはわかった。この恐るべき完全犯罪の手口をひろく公開して、新しい犠牲者の発生を防げというのだね？」

「そうだとも。そういう意味で、今度の君の作品は、天下に対する一つの警鐘となるだろう。次には、誰がねらわれるかわからない。この被害者たちの中には自殺する者も出るだろう。発狂する者もないとはいえない。一生を無にする人間もいるだろう。そういう人のうち何人かが、君の作品を読んで、事前に警戒してくれたら、それだけでも、君の役目は果たせるだろう。」

「どうも、小説と修身の教科書をいっしょにされちゃかなわないな。」

私は思わず苦笑にがわらいしたが、それと同時に、初めて心の迷いもはれた。

この友人のこのときの言葉があったればこそ、私は初めて、この背徳の物語を天下に公表する勇氣と信念を持



てたのである。

ただ、問題はその時期だった。

鶴岡七郎に約束した「ある時期」までにはおそらく数年かかると思っていたが、その後の情勢の変化によって、その時期は思いがけないほど、早くやってきたのだ。箱根の宿で、彼の話を聞いてからわずか半年の後に、私は早くもこの物語を筆にする機会にめぐまれたのである。

一編の小説の前おきとして、私のこの文章は少し冗長すぎたかもしれない。ただ私は読者諸君の前にこれだけのことをおこわりしないでは、この物語の幕をあげる気にはなれなかったのだ。

推理作家の想像を絶し、専門の法律家さえ驚嘆させた、この『世にも奇怪な物語』は、まず昭和二十三年の年頭にはじまる……。

## 一生を分ぶんで刻む男

昭和二十三年一月六日——。

東京市いちがやヶ谷の法廷で開かれている極東軍事裁判は、元首相、東条英機とうじょうひできに対するキーナン首席検事の反対尋問によって、最高潮に達した感があった。

「首相として、戦争を起こしたことが、道徳的にも法律的にも間違ったことではなかったとあなたは今でも考えておられるのか。ここで被告としての心境をうかがいたい。」

法廷の屠殺人とさつじんという異名を持っているキーナンは、顔を真赤に紅潮させ、ふとい猪首いけびをふりながら、被告席の東条にむかってきめつけた。

「間違ったことはなかった。正しいことをしたと思っ  
ている。」